

— チェルノブイリに思いをよせて —

ポレーシエ

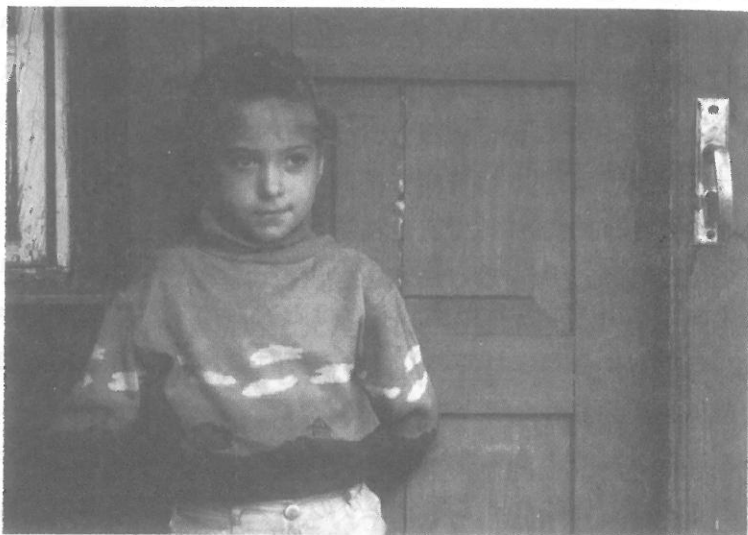


ナージャ… 8歳。
ウラジミール家の5人
家族の末娘。

人のいなくなった村
の道路や学校の校舎が
いつもの遊び場だ。

事故前には 300世帯以上が
暮らしていたが、今では遮断
機によって閉鎖され、「ゾー
ン」と呼ばれている。

村は地図からも消えた。し
かし、移住を拒み故郷に暮ら
し続ける6家族がいた。…



「ナージャの村」は、自主
上映などで静かな反響を呼ん
でいる名作、「救援・中部」
が、この夏“いちおし”の映
画です。つい見過ごしてしま
っている方は、是非、名古屋
シネマテークに足を運んでく
ださい。尚、伊那でも、自主
上映があります。(10月31日
／伊那文化会館小ホールにて)

8/22(土)～9/4(金) 連日 朝11:00～13:00 (1回/日のみ上映)

場所…名古屋シネマテーク (地下鉄今池駅下車 東海銀行西へ 180m / ☎052-733-3959)

特別観賞券… 1,400円 (当日券: 大人 1,700円; 大学生 1,500円の処)

〒466-0822 名古屋市昭和区薬園町137 1-10

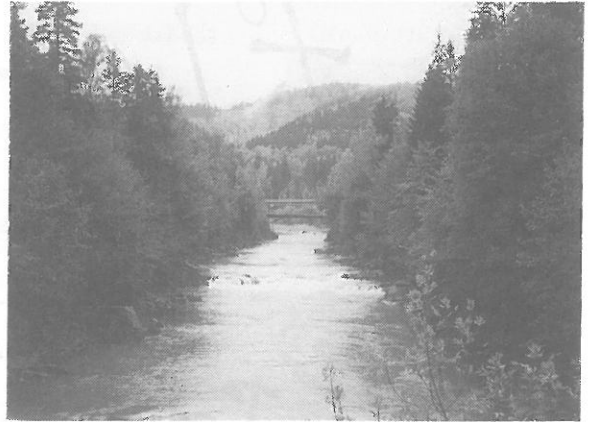
チェルノブイリ救援・中部 代表: 中島しぐれ

郵便振替: 00880-7-108610

☎/FAX: 052-836-1073 (月・水・金 10:30～15:30)

[カルパチア山脈遠足]

日本から帰国をしたアントニークさんが、ウクライナ国各州の消防署長会議の折、日本滞在の話をされ、もうすぐ訪問団が来ウすることを伝えると、イワノフランコフスク州の署長さんが「カルパチアへ招待しよう」と提案。連絡を受けた私たちは「遊びに行くのではないし、あまりにも遠いし」と、一度はお断りしたのですが、「訪問団はいつも汚染地ばかり、ウクライナの一番美しいところを見てほしい」というFaxが入り、お誘いをお受けしました。



<日本を思い出すカルパチアの美しい風景>

16日、ボリスポリ空港からジトミルへ。夕刻4:30、カルパチアを目指す。午前1時、トイレタイムで停車したおり、降るような星ぼしに言葉を失う。山麓の村の保養所に午前3:30到着。翌17日、小雨の中を散歩。リンゴの若木にはまだ花が咲いており、足元には高山性のカモミール…。車で山のほうに。途中雪を見かける。峠の向こうはルーマニア。ウクライナで一番高いところにあるというレストランで食事。雨降り止まぬ野原で羊の焼肉。ダンス。キリチャンスキー氏がずいぶん時間をかけて三輪のリンドウを摘み、私にくださいました。リンドウの深い青紫と可憐な姿はいつまでも私の心の中に残ることでしょう。

[州立孤児院(乳児院)訪問]

5月19日。子どもの数は現在100名、スタッフ127名。過去3年間に養子として引き取られた子どもの数120名。97年から今年度初めに引き取られた数66名。ほとんどの子どもが何らかの病気を持っているこの孤児院では、年齢別に保育されており、今までは3歳になると別の孤児院に送られていたが、この年齢で環境を変えられた子どもの心の傷は深く、院長ドクター・ウルスレンコの努力で、3歳児もここに留まれるようになった。「物はありません。おしめやミルクにも事欠いています。でも、皆さんがご覧になってお分かりのように、突然外国のお客様



<州立孤児院(乳児院)の子ども達と>

様がいらしても恐がったり、緊張したりする子は一人もいませんよね。これは私どもが心のケアを第一に養育しているからなのです。」3歳児のダンスや歌で歓迎していただき、その可愛らしさ、明るさに涙してしまいました。院長もお話をされる度、涙を浮かべてらして、彼女の孤児院に対する深い想いに頭が下がりました。ここへのミルク支援は97年からですが、私たちの努力がお役に立っているという、「顔と顔の見える支援」を実感できた訪問でした。

＜「移住基金」との長い長いミーティングの後に＞

神野 英樹

前号（45号）の編集後記にも書きましたが、この5月の訪問時に、私達代表団は、ロシア語バージョンのパンフレット「知ってください」を（P.12 参照）100部ほど用意して持って行きました。新しい出会いあり、久しぶりの再会ありと、いつものまにか用意した100部のパンフレットがすっかりなくなってしまうほど、たくさんの人々と出会えた素晴らしい旅になりました。

いつもながら、ウクライナの人々との交流は心温まるものがあり、強行スケジュールにもかかわらず、「また必ず訪れよう」という清々しい気持ちになるのです。これは、現地を訪れる代表団の誰もが味わう経験だと思います。しかし、この紙面では、少し気の重くなる話をしなければなりません。ウクライナの経済の混乱は、私達のパートナー「移住基金」をも例外とせず、深く包み込んでしまっているからです。

今まで、「移住基金」の活動を支えてきたジャーナリスト連盟は、長引く不況の中で赤字経営が続き、彼等の重要な収入源であった「ヴィースニク新聞」が、ついに廃刊に追い込まれてしまいました。連盟所属のジャーナリスト達は、新たにスポンサーを見つけ出し、秋には新しい新聞を発刊して再起を図ろうと懸命の努力を続けていますが、道りは遠く厳しいものがあります。そして同時に、この事は、「移住基金」のボランティア活動の継続の危機をも意味しています。具体的には、国際通信費（主にファックス）・事務所の賃借料・光熱費などの諸経費が、大きな負担となってきています。ウクライナでの長い長い話し合いの後、日本に帰った私達は、何度も運営委員会を開き、3ヶ月にわたる熱い議論の末、一つの結論を導き出しました。それは、「この危機を乗り切るために、「移住基金」の活動を支援しよう。これは、ウクライナの被災者の支援を継続する事でもある。」というものでした。具体的には、私達の救援活動に不可欠な「ウクライナ現地での業務」を委託する代償として、「移住基金」に「業務委託料」を支払う



＜ナロジチ消防署で救援物資を確認する

「移住基金」代表（リチャンスキーさん）＞



＜保健省パラモノフ大臣との話し合い＞

という形で、一時的に資金援助をする事になると考えています。また、外務省の「NGO草の根支援」制度などのように、現地のカウンターパートに対して、直接、資金援助をする制度があるという事を知りましたので、「移住基金」自らの手で、彼等の活動に必要な資金の交付を申請するように働きかけ、またアドバイスをしていきたいと考えています。是非、皆様のご理解とご協力をお願いいたします。

＜郵政省ボランティア貯金から656万円が交付されました！＞

チェルノブイリ救援・中部 様

平成10年 6月22日

郵政大臣

自 見 庄三郎 閣

国際ボランティア貯金に係る寄附金の配分額等について（通知）

標記については、下記のとおり決定したから、郵便貯金の利子の民間海外援助事業に対する寄附の委託に関する法律施行規則（平成2年郵政省令第58号）第8条の規定に基づき、通知します。

記

1. 配分額	6, 560千円
2. 項目	チェルノブイリ原発事故被曝者に対する検診・医療機材の整備 [ウクライナ]
詳細	[州立小児病院への支援] ・医療機材購入（粉ミルクは除く） 4, 736千円 [ゼレムリャ診療所] ・医薬品・滅菌器購入費 408千円 [ブルシロフ病院] ・医薬品購入費 1, 416千円
	計 6, 560千円

—以下、省略—

これで、8年連続して「ボランティア貯金の寄附金」を交付していただける事になりました。今にして思えば、私達の活動は、まさに「ボランティア貯金制度」とともに歩んできた感があります。最近は、長引く日本経済の不況により、預貯金の金利も史上最低に抑えられており、すべてのNGOにとって「交付金の絶対額が徐々に減少している」という厳しさはありますが、この制度に賛同していただいている皆さま方のご協力があったはじめて、私達の活動も成り立っているのだと感謝しています。

ただ、上の表からもわかりますように、残念ながら今年は、粉ミルク支援に対する交付が認められませんでした。私達は、『粉ミルク支援は、これからもぜひ継続していきたい』と考えていますので、皆さま方のご支援をよろしくお願いいたします。（J）

ウクライナ↔日本 <情報ホットライン>

6/29(日→ウ) 郵政省の交付金が今年も認可されました。総額は、656万円です。この交付金でブルシロフ病院から依頼のある、BCG用の注射器を援助することができます。必要な数と金額を院長に聞いてください。日本とジトーミルとで文通をしている人たちの状況について情報がありましたら知らせてください。



6/30(ウ→日) ブルシロフ病院は3600人の子ども達にBCGを接種します。注射器の値段は0.15グリフナ/本で、540グリフナ(約4万円)必要です。接種は、新学期が始まる9月より前に実施しなければなりません。…移住基金は文通相手の人に手紙を出し、その様子についてすでにお知らせしました。その後、彼らからの返事はありません。実際彼らが返事を出せないのは、封筒を買うお金もないからです。…郵政省の財政支援に関する良いニュースに、多くの病院が喜んでいますが、あなた方の救援が続くおかげで、ジトーミル州のたくさんの人々が困難な時を生き残れるのです。

7/06(ウ→日) 州立小児病院の医療機器(麻酔・人口呼吸器付きエアークントロールシステム・パーヒュージョンポンプ等)に関する情報を送ります。私たちは、副院長と医療機器会社(ドイツのドレーガー社)の代表と話し合い、あらゆる点から検討した結果この会社から機器を購入するべきであると決めました。出来るだけ早く承認・決定をしてください。と言うのは大統領が「救援物資であっても課税対象とする」という新しい法律に署名しようとしているからです。ゼレムリャ診療所の滅菌器は800~900\$です。購入した残金は医薬品代にあてます。

7/13(ウ→日) ブルシロフ病院への注射器のお金はすでに振り込まれ、明日にでも病院は注射器を受取るでしょう。事故処理作業協会のお金を換金し、薬局に振り込みました。たくさんの医薬品が彼らのために購入されています。

7/16(日→ウ) 5月に代表団が持ち帰ったナロジチの放射能データの分析をしています。今もまだ汚染していることに驚いています。チェルノブイリの事故は、人間の歴史上唯一の核事故なのです。私たちは、これらのデータからたくさんのことを学ぶことができます。

7/16(ウ→日) ナロジチ地区(住民16,200人)を廃止し、新たな行政単位とする問題について、州の行政当局内で深い議論がなされました。地区病院を廃止し、暖房設備の修理はしないと言うことです。しかし、住民によるたくさんの不満や反対する意見が広がって、行政当局は地区を残し、病院は今後も機能することになりました。フェニックス社は、8月中旬までに資金を準備できるならば、暖房が始まる10月15日までに全ての工事を完成できると言いました。スベトコール薬局が量販のライセンスを取りました。今までよりも安く購入できます。ゼレムリャ診療所用の滅菌器を見つけました。お金が振り込まれたらすぐを買います。ブルシロフ病院はBCG用の注射器を受け取り、すばやい援助に深い感謝の意を表明しています。(つづく)

また工事に行ってきます。

長野県南箕輪村 原 富男

ナロジチ地区病院の外来棟暖房工事の実施が決まりました！これまでに「救援・中部」は、'97年2月に給湯給水工事、同じく9月に暖房工事の支援を行ってきました。9月の暖房工事は、石炭不足と老朽化により病院自前のボイラーが使えないことから、急ぎよ、地域暖房（天然ガス）に繋ぎ変える工事をしたわけですが、「外来棟では配管詰まりのため暖房温度が上がらない」という問題が残りました。このため外来業務を入院病棟に移してやりくりしてきました。今回の工事費は、「救援・中部」の自己資金100万円、外務省の交付金210万円、計310万円で計画して来ましたが、7月31日時点で、外務省から交付金（金額査定中）が配布される見通しとなりました。派遣費用（ゼレムリヤ診療所水道工事・ナロジチ地区病院工事）は、建設省に申請していましたが、これも見事交付が決定しました。これで本格的に工事に取りかかれる目途がたったわけです。

現地からは、「8月に準備を始めれば、10月15日の暖房開始日に間に合うのだが…」という問い合わせがあり、「何とかまにあわせたい」と思っていたのでほっとしました。

ナロジチ地区を巡り、国の資金不足から、地区の廃止・病院の廃止（新たな独立行政単位に統合する案）が州行政当局で議論されたようです。しかし、人口19,200人の地区を廃止することに住民の不満が爆発し、行政当局は地区も病院も残すことにしたそうです。また外来棟には、老人支援センターを置いたり、保健衛生ステーション（地区の生産物の放射能測定をし、販売許可を与えるなどの重要な役割を果たす）を置くようです。廃止問題が議論されたことを考えると国の財政状態はより厳しくなっているように思われます。保健衛生ステーションや老人支援センターは、はからずも「救援・中部」の中で話されてきた「ナロジチ再生（移住できないならば、出来るだけ汚染を避けて生活する）計画」とも合致する流れだと思います。

早いもので給湯給水工事から一年半がたとうとしています。実は、一ヶ月間の休業は、自営業にとってきついものがあります。出発の前日までに、屋根工事や生コンと格闘する本業を終えなくてはなりません。だからウクライナへ旅立つ飛行機に乗ったときは「終わった〜！」という気分になります。仕事が追いかけてこない解放感と、出会いの楽しみは格別なものがあります。コレって病気かな…。結局どこに行っても仕事をしている。これが貿易摩擦の原因、エコノミックアニマルと言うのかも知れません。「でも行きます！」僕は今回の暖房工事でも、昨年と同じように現地の人達と一緒に工事をするようになります。そして、時間が取れたら地域の汚染実態・生活実態・農業等がどうなっているのか、地域を見て回りたいと思っています。そして、去年はナロジチの小さな彼女と大人達に、折紙を流行らせたので、「今年はビー玉でも流行らせようかな〜。」なんて考えています。あぁ〜忙しい。



＜壊れた暖房設備の説明をする
コロミチュク院長(外来棟にて)＞



チェルノブイリ救済中部・金沢

◎定価 1,000円 (税別)

この本の収益は、原発事故の被害を受けた子ども達のために、ニーナ基金を通じて送られます。

後半には、「コオロギちゃん達」のニーナ先生が編集した、49編のウクライナからの手紙が掲載されています。その一遍一遍に心打たれ、静かに考え、ともに怒り、涙し、そして希望を見つけだすのです。(J)

私たちの仲間、「チェルノブイリ救済中部・金沢」の東しげのさん達が、日本の「オリヅルちゃん達」とウクライナの「コオロギちゃん達」の、7年間にわたる心暖まる交流を綴った本「チェルノブイリは続く…」を出版しました。この交流は「救済・中部」の「マザートゥマザー・日本の母からウクライナの母へ」という文通の架け橋がきっかけとなり始まりました。

ウクライナのニーナ先生へ

初めて出したロシア語の手紙

ジトミールのニーナ先生 お元気ですか。ほくちちわたしたちは、日本の国の金沢市の富樫小学校の二年四組のものです。クラスの人数は男一六人女二〇人、合計三六人です。

わたしたちはきょねん羽づくろぎ、カリフォルニア州ストランドウッド小学校の友だちにおくりました。そして、そのおかしに雪のけっしょうの絵としゃんをおくりてもらいました。なぜ、わたしたちがつるをおっているかというところは「げんはくがなくならずよしい」「もっせんそがことおこりませんよに」と思っています。までつるをおつてきました。ほくちちわたしたちが一年の時から、まい日いっしょけんめいおつてためたつるが今やく五五〇〇ほど教室につるしてあります。

五年前ソビエトではチェルノブイリの、げんし力はつでんしよがはくはつして大へんでしたね。みんな元氣ですが、体のちようじはいいですか。みんな早くけんこうになるといひです。ほくちちはそれをねがっています。

ニーナ先生のクラスの人数はなんですか。それに、なん年生をうけもちですか。学校中の人数はなんですか。わたしたちの学校中の人数は八三〇人ほいいます。

この手紙がといたちかならずおへんしを書いてください。たのしみにまっています。

一九九一年六月五日

金沢市富樫小学校
二年四組のみんなより

「ウクライナの英雄達」

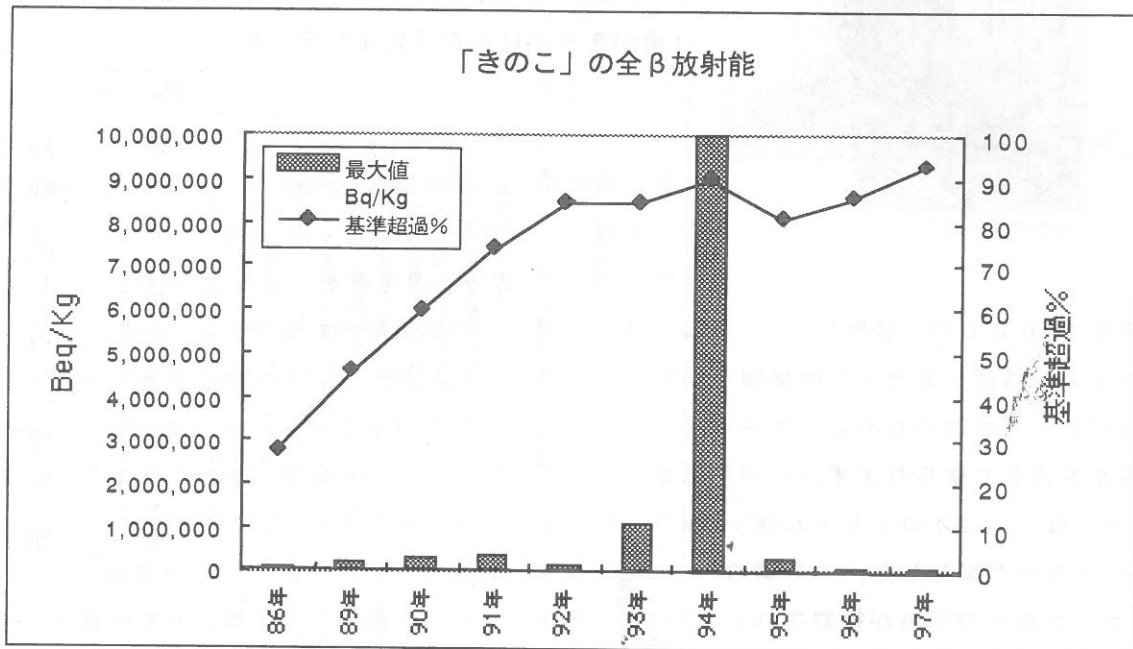
リーナ・カバレフスカヤ (17歳 キエフ)

(前略) キエフではパドル地区から鉄道の駅まで路面電車が通っています。これは「記念」という名の路面電車です。その路面電車の中では乗客達が小声で話し合っています。車掌なしの電車です。チェルノブイリ原子力発電所の事故処理にあたった人達の画像が電車の壁面にかかっていますが、その壁面からじっと乗客を眺めています。彼らはとがめるように、生きている私達をきびしく見つめています。彼らはその原子力という怪物との凄まじい闘いの中で死んでしまったのに、私達はこうして生きているのです。英雄である事故処理にあたった人達の顔は生きている者に訴えます。「皆さん！用心深くして下さい。地上の命を守って下さい」と。原子力ーそれは非常に危険な代物です。しかも地上はどこを見ても子供達ばかりです。このことを記憶しておかなければなりません。



ナロジチ地区の「きのこ」の放射能

項目	86年	89年	90年	91年	92年	93年	94年	95年	96年	97年
最大値Bq/Kg	59,200	145,040	271,950	330,410	107,300	1,036,000	9,990,000	277,500	32,190	44,400
基準超過%	28	46	60	74	85	85	90	81	86	93
測定検体数	32	219	380	269	153	不明	153	246	197	182



このデータを見て「うそだ!」と思う人もいるかも知れない。筆者もその一人である。チェルノブイリ事故から12年が過ぎ、放射能もそろそろ少なくなっていると多くの人が思っている。しかし、このデータを見ればそれが如何に甘い期待と幻想であるか思い知らされる。原発から70Kmのナロジチでは、放射能は未だに続く災難であるどころか、人々の大好きな「きのこ」の放射能は、事故直後よりもむしろ増大し続けて来たのである。ナロジチでは事故後、様々な食品を中心に毎年6000~8000件数の測定が続けられてきた。これはその膨大なデータのまとめの一部である。「きのこ」は元来放射能を蓄積する性質があり、他の物より高い値を示すことが多いが、それにしてもこのデータの最大値は信じがたいほど高い。しかも事故から8年経った1994年が最も汚染がひどく、その後は減衰傾向にあるが、基準を越えるものはむしろ増加している。今、ナロジチ地区の茸の90%は基準を越えている。「きのこ」の他にも、肉類やミルクなど、未だに放射能が基準を越える物は多数ある。86年から90年にかけて基準超過割合が少ないのは、そもそも基準値自体が高かったからである。念のために、現在のウクライナの食品放射能の基準をあげておこう。

() 内数値は、前者がセシウム137、後者がストロンチウム90の基準である。

- パン (20, 5) ジャがいも (60, 20) 野菜 (40, 20) 果物 (70, 10) 肉 (200, 20)
- 魚 (150, 35) ミルク・乳製品 (100, 20) 卵 (6, 2) 飲料水 (2, 2)
- 生いちご・茸 (500, 50) 乾燥いちご・きのこ (2500, 250) 薬草 (600, 200)
- 特殊ミルク製品 (40, 5) その他 (600, 200)

(河田昌東)

ウクライナ・キエフ市出身の25才。1995年から救援・中部のウクライナ訪問団の通訳として働いてもらっています。今年の4月から名古屋大学大学院国際開発研究科に留学中で、93年の大阪外大に続いて2度目の留学。高校生の時から日本語を勉強し、大学では言語学専攻だったのになぜか医学専門用語にも強くて、ジトーミル各地での病院視察では彼ならではの通訳で大いに活躍してくれました。あらためてチェルノブイリ事故の被災体験について聞きました。

Q：チェルノブイリ事故の時、どこで何をしていましたか？—当時13才で、キエフ市の中学校2年生でした。

Q：事故をいつ、どのように知りましたか？

—事故の翌日、'86年4月27日です。キエフの南70キロに住む親戚がキエフに来ようとしたが、避難のためのバスが集められて)交通事情が変わり、バスが無くて変だな？ということから、事故があったらしいというわさが一部に流れてきました。正式な発表はまだありませんでした。



＜右端がアンドレイさん。ブルジョア病院にて＞

Q：キエフのまちの様子は？—いつもと変わらず、翌日の27日には暖かい春の雨が降り、私はずぶぬれになってしまいました。5月1日のメーデーのパレードにも皆と一緒に出ました。でも駅では避難の人々で列車の屋根まで一杯だったようです。

Q：避難はいつから始まりましたか？—5月7日から学校毎に集団疎開が始まり、子ども達は親から離れてクリミヤへ行きました。ただし私は病気がちだったので親戚の家へ避難しましたが…市民はパニック状態でした。でも9月には皆もキエフに戻り、学校は再開されいつものように新学期が始まりました。

Q：食べ物？—私のうちではまちの市場では買わず、田舎の親戚からじゃが芋などを手に入れていました。後でここも汚染されていたとわかりましたが…。きのこは事故以来食べていません。人々の間では生のきのこは危なくて、干したものは大丈夫(?!)などと…。

Q：事故の影響で健康状態は変わりましたか？—みんな風邪を引きやすくなり、疲れやすくなりました。そして病気の人には病状が更に悪化しました。身内にもそういう者が何人かいて、自分自身もしょっちゅう風邪を引きます。叔父が去年ガンで50才で亡くなりました。

Q：原発、あるいは原発事故についてどう思いますか？—原発は危ないし、事故も相次いでいるので良くないと思います。だが、現在ウクライナでは核のエネルギー無しで経済が成り立たない。第一の課題は原発の安全性を上げること。そのためにもっと情報を公開して監視できるシステムを作ることが大切だと思います。

Q：日本からの救援についてどう思いますか？—ウクライナでは病院なども自分の力だけではどうにもならないので、日本からの市民の救援があって本当に助かると思います。皆さんと違って、今は国も自分自身にも余裕が無くて何もできないのですが……。

竹内さんの

ウクライナ便り (チェルノブイリ救援・中部)

<1998. 6. 24> キエフ駐在 竹内高明)

世論調査：(成人1200人回答) (『日々新聞』6/4号)

「ウクライナの将来にとってよりよい経済システムとは？」

自由市場経済への速やかな移行… 8%

市場経済への段階的な移行… 14%

部分的な国家の規制を伴う市場経済… 19%

国家による規制の強化と企業の部分的な再国営化… 22%

計画経済への復帰… 21% 答えにくい… 15%

<1998. 6. 29>

◎6月25日に追試を含めた学年末試験が終わり、昨年からやっていた「必修最低限語彙(日本語講座用教材)」選定作業も終わって、やっと時間ができました。(中略)大学の夏休みの間に、ウクライナの人々のインタビュー集の仕事にかかるつもりで、具体的には何人かの人に依頼してあります。6月に、私の大学の学生で、イスラエル資本の入った救急医療会社に努めている25歳の既婚女性のインタビューをしましたが、まだテープに録音してあるだけです。一冊の本になるぐらいの分量のインタビューを集めようと思っています。

<1998. 7. 10>

・放射性物質規制が行なわれていないキエフ市内の路上や地下道の市場で、放射能の高いキノコや果物が売られているとキエフ市当局が警告。購入に際しては、放射能測定済みの証明書をみせるよう要求するのがよいと勧告。(『イズヴェスチャ・ウクライナ版』7/2号)

・スイス・バーゼル市の市民有志は10年に渡りジトミル州ルギヌイ地区リブニカ村の子ども達をスイスの山のキャンプ場での保養に招待。この夏も70人の子どもと同伴の大人10人を招く予定。資金はスイスの一般市民の募金やスイス政府の援助。(『日々新聞』6/24号)

・7月1日内閣により決定、最高会議で検討される予定の98年度予算修正案によれば、チェルノブイリ関連予算(事故の事後処理と被災者の社会保障)は11億2600万グリブナ削減される予定。大蔵省情報では、チェルノブイリ関連予算総額は14億7900万グリブナ、被災者の社会保障は11億2000万グリブナになるという。軍事、教育、保険、文化、エネルギー、農業関連の予算もそれぞれ削減の予定。(『首都新報』7/7号)

<1998. 7. 22>

・チェルノブイリ原発で唯一稼働中の原子炉(3号炉)の制御システムにトラブルが発生。燃料チャンネルの一つが基準以上のエネルギーを放出し始め、原子炉の出力が許容量を超えた。原因は調査中。(『イズヴェスチャ・ウクライナ版』7/15号)

・98年前半期の原発でのトラブルは37件。これは昨年同期の1.5倍。原因は設備の老朽化と原発の資金不足に伴い、安全基準がなごりにされていることである。(『同』7/18号)

◎この頃は暑い日(28℃)と涼しい日(15℃)がころころ入れ替り不順です。日本はいかがですか？



参加しました!! 「フェスティバル」と「フォーラム&バザー」

①『あいち国際プラザ・フェスティバル』6/20-21 (於;県庁三の丸庁舎 国際プラザ)

民間ボランティア団体が多数参加し、国際色豊かに交流しました。官庁街の一角にこんな立派な公共施設があったなんて知らなかった!!もっと市民にも開かれ、ボランティア活動の理解や発展につながってほしいのだけれど…。(J)

②『いっしょにやろまいNGO!ー'98中部NGOフォーラムー』6/27-28 (於;国際センター)

今回で三回目のこのフォーラムでは、国際協力について市民と政府・企業・自治体がお互いを知り、それぞれの立場で何ができるかをともに考え、それぞれが対等なパートナーシップを作っていくことを目標にして、シンポジウム・分科会で話し合われました。(京)

『ポレーシェ』読者からの手紙

ウクライナからのご挨拶

くちなしの甘い香りが漂ってくる季節になりました。先日はお手紙をありがとうございました。チェルノブイリ事故からもう十二年になるのですよね。

三年前に交通事故で他界しました二男もこの年の五月三十日に生まれました。放射能に侵され、病気と闘い、日々弱っていく姿は、代わってあげることのできない親にとってこんなつらいことはないと思います。わずか九年で他界してしまった息子の代わりに、一日でもこの世で生きていて良かったと思ってもらえるように、息子の誕生日に送らせていただきました。何かの足しになれば幸いに思います。(吉本ご夫妻より)

親愛なる皆様、こんにちは!

カデリチュク一家、とりわけ私どもの両親からのご挨拶を皆様に申し上げます。

皆様が私の母に贈ってくださった車椅子を、五月八日に受取りましたことをお伝えいたします。どうもありがとうございました。大きなよろこびとたくさんの涙がありました。

車椅子は大変便利で美しく、これでもう外に出てみました。そして皆に『これは日本の友人にいただいたものだ』と話しています。母も泣いて、口では言えないほど喜んでいます。両親は健康ではありません。私は手助けするために、土曜日毎に両親のところに行きます。(後略) (カデリチュクより)

事務局便り

いよいよ夏本番。皆様いかがお過ごしですか。五月のアントニーク旋風が去って、事務局もちょっと一息。でも毎日の仕事は途切れなく、スタッフは蒸し風呂のような事務局で頑張っています。新たに大島弘美さんがボランティアでパソコンの入力を担当、エクセルと格闘しています。定期便のように毎月カンパを送ってくれる人、「まだ忘れていませんよ」とばかり三年に一度振替用紙を送ってくれる人、ポレーシェ発送のボランティア。スタイルは様々でも運動を支え励ましてくださる約三千名の方々の心を被災者に伝えることが私たちの仕事だと、当たり前のことながらいつも考えさせられます。ウクライナからやってきた人は誰もが事務所のオンボロさ加減に驚き、初めて自分たちを援助してくれるのが日本のお金持ちではないことを悟り、戸惑い、そしてようやく私たちの援助の本質を理解するのです。(河田)



パンフレットができました！！

私たち「救援・中部」のPR用パンフレット「知ってください」のロシア語バージョンが完成しました。このパンフレットは、今、名古屋大学に留学中のアンドレイさん(P.9参照)が、翻訳してくださったもので、先のウクライナ訪問でも大活躍した“すぐれもの”です。手にとって読んでみたいという方は、事務局(052-836-1073)までご一報ください。もちろん日本語バージョンご希望の方も大歓迎！

そうそう、英語やドイツ語、フランス語バージョン等もラインナップしたいのですが…

どなたかボランティアで翻訳して下さいますか？

連絡を待っています。(J)

チェルノブイリ原子力発電所の事故は………たくさんの方々を被害を与えました。

1986年4月26日に、この地のウクライナ共和国で起こりました。凶悪、長年にわたる悲惨な放射線の放射能が、空高く舞い上がり、ウクライナ・ベラルーシ・ロシアの3国を中心に、広大な大地に降り積もったのです。汚染された電線は、日本全体の3分の1にも匹敵します。事故当時、放射能は日本にも飛んで来て、野菜やお茶、飲み水などを汚染しました。



チェルノブイリ原発事故

放射能は、特に子どもたちに大きな被害をもたらしました。甲状腺がんが増殖し、白血病、下痢による感染症、貧血などで、たくさんの子どもたちが苦しんでいます。

私たち「チェルノブイリ救援・中部」は、

チェルノブイリの被災者を支援しています。

汚染されていない粉ミルクを届けています。降り積もった放射能が牧草を汚染し、ミルクが飲めなくなりました。私たちは、汚染されていない粉ミルクを、子どもたちに届けています。



病院の給湯設備工事や暖房設備工事の支援をしています。汚染地域にある子ども病院では、事故の後、水もお湯も出ない状態が続いていました。私たちは、壊れていた給湯設備や、暖房設備の復旧工事を実施しました。こうした努力に対して、1987年11月ウクライナ地区の名譽住民の称号が与えられました。



チェルノブイリ

を支援しています。

病院や診療所に医薬品・医療機器を送っています。医療が十分なウクライナでは、被災者が病気になって十分な治療を受けられない状態が続いています。私たちは、現地の病院や診療所に超音波診断装置や保育器などの医療機器を送り、救急物資や食糧も現地の医療従事者に届けています。



チェルノブイリ

事故処理作業員の支援もしています。



「移住基金」の支援にご協力を！！

現地のパートナー「移住基金」の財政がピンチ！！

通信費・光熱費・事務所賃貸費などの支援 にご協力をお願いします。

◎1,000円/口(何口でもOK)…通信欄に「移住基金」と記入してください。



編集後記

- 「私のキャリアはボランティア!？」ふと自分を振り返れば、教育・食の安全・環境問題・福祉などの市民運動やボランティア活動の15年だった。まだまだ明日も休めない。(京)
- 保健関係の報告書、「事故後10年と市民の健康状態」の翻訳が、ボランティアの力を借りて少しずつ始まった。現地の情報を集める係、公開する係、すばらしい連携プレイ。(美)
- 今年の夏休みは、『チェルノブイリは続く』と一緒に読み、「ナージャの村」を一緒に観る。子どもだった娘(18才)もまた、語り継ぐ人になろうとしている。(J)

“ぼらんていあ・勢文社”さんの一身上の都合により、今回の印刷から“ぼらんていあ・第一印刷(株)”さんになりました。これからもよろしくをお願いします。